

漢字、もっと観字に

北 端 信 彦

はじめに

大阪芸術大学・デザイン学科のコミュニケーションデザインコースにおいて、筆者は2回生の〈コミュニケーションデザインI・II〉を担当している。

持時間5回（5日）のうち、前半3回を「和文タイポグラフィ」、後半2回を「英文タイポグラフィ」にあてている。

この「和文タイポグラフィ」の3回を使って制作されたのがこの稿に掲出された作品30点である。

出題時、筆者の作品も見せながら説明するうち、繰り返し口にするのは、「絵の要素を加えて説明しないように」ということである。絵の要素を加えると、もうそれは〈ヴィジュアルデザイン〉になってしまって、狭義での〈タイポグラフィ〉ではなくなるからである。そしてできあがった作品は後日、明朝体の漢字になり得るようにとも言う（実際に学生たちが明朝体の漢字に作り直すわけではない）。筆者としては、漢字成立初期の〈金文〉を意識して原初的な文字を、と求めているので、後の時代の〈楷書体〉のいわゆる“書道文字”にならないようにということである。

以上が、ここに並べられた作品群の背景とコンセプトである。

漢字とは

ここで『漢字』について改めて振り返っておきたい。世界の文字には大きく分けて〈表音文字〉と〈表意文字〉がある。

1つ1つの文字に意味はなく、音だけを表すのが、表

音文字で、日本の仮名やアルファベットがその代表的なものである。一方、表意文字の代表は、ここにとり挙げた漢字である。

一般に漢字は、すべて象形文字であるかのように言われるが、これは正確ではない。何故かというと、漢字の成り立ちには6通りの方法があるが（これを六書という）、このうちの1つ、〈象形〉は漢字全体から言えば、わずか5、6%に過ぎないからである。

とは言え、漢字の表音文字に比べての特徴はなんといってもその象形性と表意性にあるのであり、6通りの成り立ちの中でも〈象形〉が、歴史的にみても、その原初的な方法であることから、漢字らしさを備えたものであることに変わりはない。

漢字はそれを覚えるにあたって多大なエネルギーを要すること、読み方の難しいこと、印刷等にあたっては、活字であれ、コンピューターのフォントであれ、あらかじめ沢山の文字を準備しなければならないこと等、これらの点に関しては非能率的である。諸橋轍次の『大漢和辞典』には約5万の漢字が載っているが、文部省の常用漢字はギリギリの線まで減らしているものの、それでも約2千字、仮名に比べると40倍、アルファベットの26字に比べると80倍強にものぼる。

これ等のことは漢字の負の要素であるが、一方、読めなくても、すなわち〈見る〉ことによって意味を伝達できる表意性の素晴らしさは、今日、それを使用する人口が世界中で第2位の順にあること（金田一春彦『日本語』新版〈下〉岩波新書）でも明らかである。また、1字が正方形でできていることと共に、文字をタテにもヨコにも扱えることも長所の1つであろう。

ここではその漢字の長所である〈表意性〉をより強

調・拡大することにより、なお一層、漢字のもつ特長を宣揚しようとするものである。

グラフィックデザインにたずさわるかぎり、伝達の告知性の中心をつとめる文字、就中、主役を果す漢字との縁は切れないが、学生達には、いい意味での遊び心で、漢字に興味を持ってもらい、タイポグラフィーがこの課題を契機に好きになってもらえればと思い、こういう課題をとりあげたのであった。

白川文字学と『説文解字』

ここにNHK制作の番組を録画した1本のテープがある。タイトルは「老いて遊心／学を究めん・白川静／漢字の宇宙」である。

我々が漢字を辞典で探す場合、漢字の総画数か、そうでなければ、部首から索引する。この部首から索引するという考えのもとをつくったのが中国の許慎(きょしん)という学者だとされている。約2,000年前のことで、著した書籍を『説文解字』(せつもんかいじ)という。

ところが、今から100年余り前、中国の殷(いん)の廃墟から多量の、占いに使われたとみられる牛の肩甲骨と亀の腹側の甲羅が出土した。それらには文字の原初的なものとされる記号が刻まれていた。いわゆる甲骨文字である。殷は約3,200年前の中国の、最古の都があった地域である。許慎が手に取ることができなかった資料が今日の研究者には利用が可能である。

立命館大学名誉教授白川静先生はこの甲骨文字を手掛かりに日夜研究を積まれた。『字統』、『字訓』、『字通』の文字学3部作は代表的な著作である。“許慎の説文解字学派”はこれにより大幅に誤謬を正されることになる。

2004年には長年にわたっての文字・漢字の研究で文化勲章を授与されたのは耳新しい。筆者は大阪芸術大学・通信教育部の教科書執筆にあたり、上梓の折、京・桂川畔のお宅に引用のお礼のご挨拶に伺ったのであ

たが、90歳を越えられての矍鑠(かくしゃく)ぶりに圧倒されたことであった。

NHKの番組の制作は2001年で、受章の3年も前のことである。具眼の士がNHKにいたことになる。

この50分番組のVTR、授業の最初に学生達に見せて課題の理解の一助にしていることはいうまでもない。

ここでは課題のコンセプトをよく理解し、筆者の目で見て、よくできていると思われる作品を選んで、紹介することとしたい。

〈参考文献〉

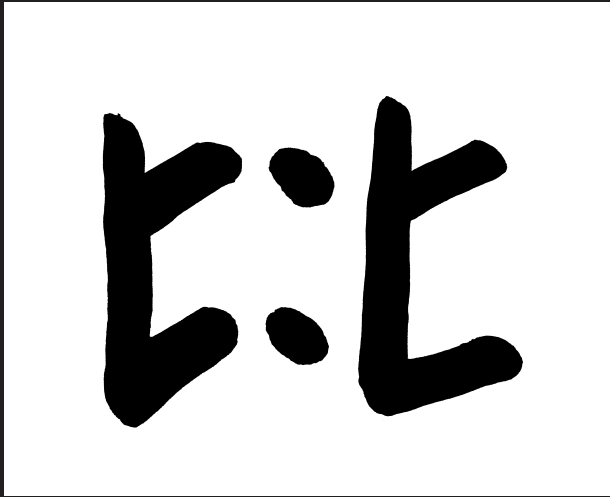
- ・字統／白川静／平凡社
- ・常用字解／白川静／平凡社
- ・日本語・新版〈下〉／金田一春彦／岩波新書
- ・漢字講座=1 漢字とは／中村完他／明治書院
- ・漢字のいい話／阿辻哲次／大修館書店
- ・教養の漢字学／阿辻哲次／大修館書店
- ・図説・漢字の歴史／阿辻哲次／大修館書店
- ・漢字と日本人／高島俊男／文春新書
- ・漢字の感字／伊藤勝一／朗文堂
- ・漢字／白川静／岩波新書
- ・ことばと文字／編＝岸俊男他／中央公論社
- ・文字逍遙／白川静／平凡社
- ・人間と文字／矢島文夫監修・田中一光構成／平凡社
- ・図説・日本の漢字／小林芳規／大修館書店

〈追伸〉

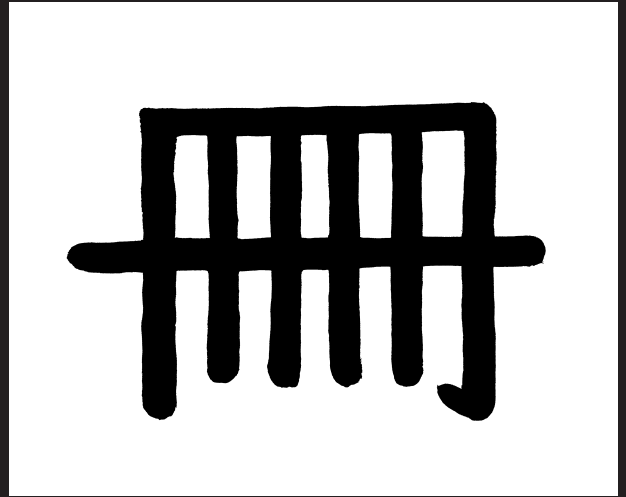
2006年11月初旬、白川静先生の訃報に接した。先生の漢字をテーマにしたエッセー『文字逍遙』(平凡社)を拝読すると、先生の文字に寄せる愛と喜びの情がいかに深いものであるかが感じられ、『藝術』が上梓の折には一部お送り申しあげ、ご批評を頂戴するつもりでいたのであったが、それも今となってはかなわぬこととなってしまった。

書齋の床に山のように積まれた自著の校訂版のゲラ刷りを見ながら、毎日、20頁、30頁とかたづけていけば、こんなものはすぐ終る。「中国には『山を遷す』という言葉がある。これぐらいなんでもないのでや」と言われたお声が忘れられない。

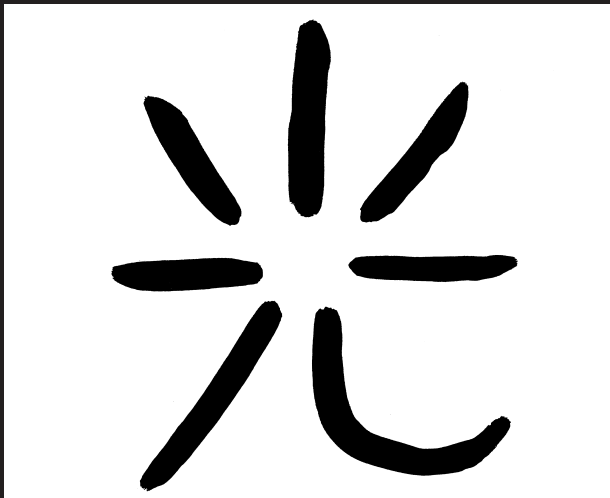
衷心よりご冥福をお祈り申しあげる。



①



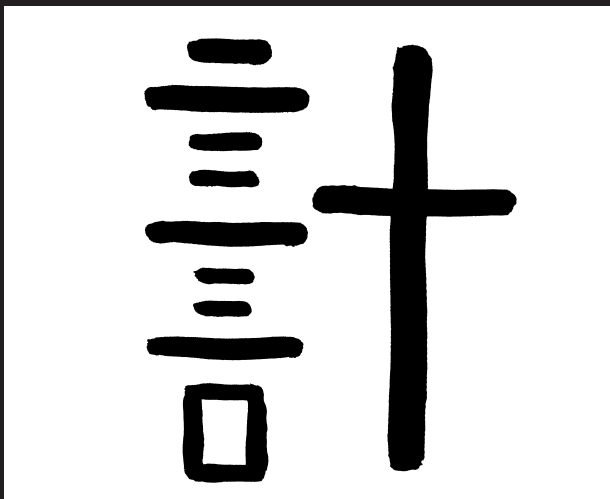
②



③

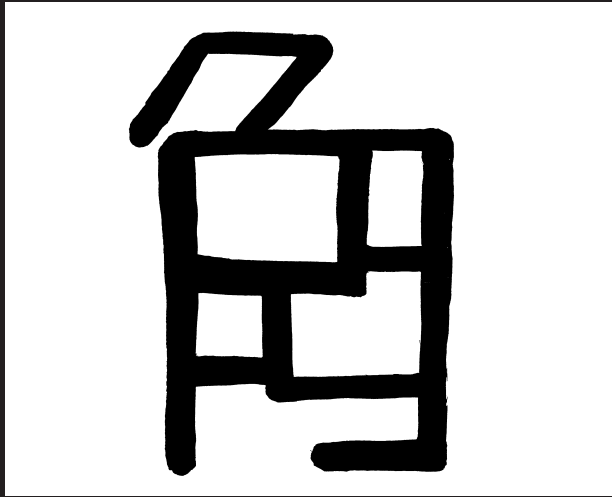


④

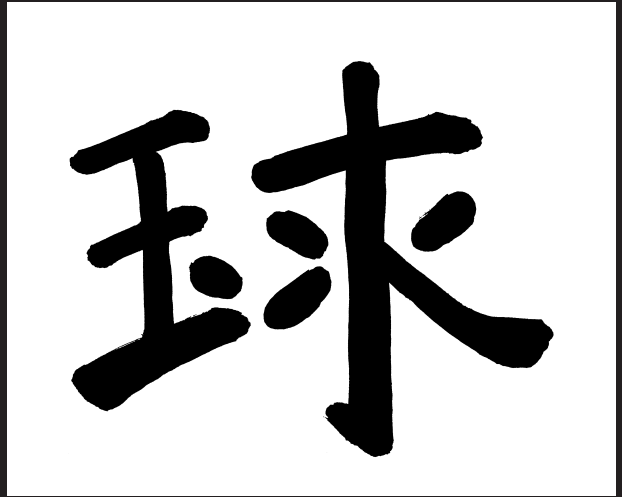


⑤

- ① 「比」 D01-097 辻井江里子
〈ヘン〉と〈ツクリ〉がおなじであることに着目、点を2つ加えて字のもつ意味を強調した
- ② 「冊」 D01-178 大森規世
冊の字は、もともと、竹簡、木簡をヒモで連結したのもの
- ③ 「光」 D01-191 取森あゆみ
字の中心部を欠損させて光源とした
- ④ 「差」 D05-246 山本莉紗
差の“エ”の部分が多と一で字の意味性を強調した
- ⑤ 「計」 D01-213 川井美穂
ヨコ画の針が上下して〈ゴンベン〉の目盛を上下する



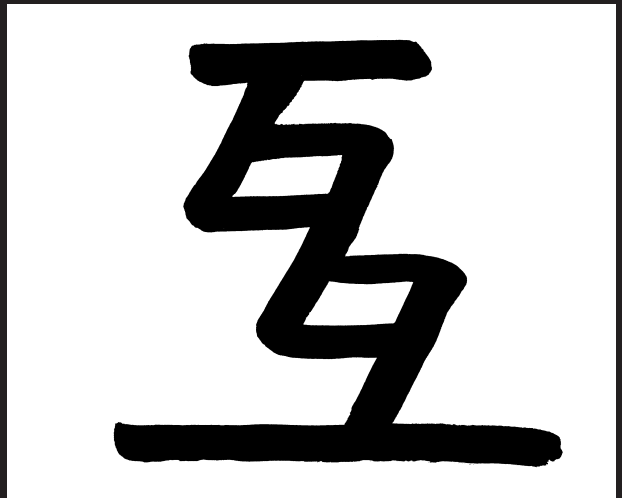
⑥



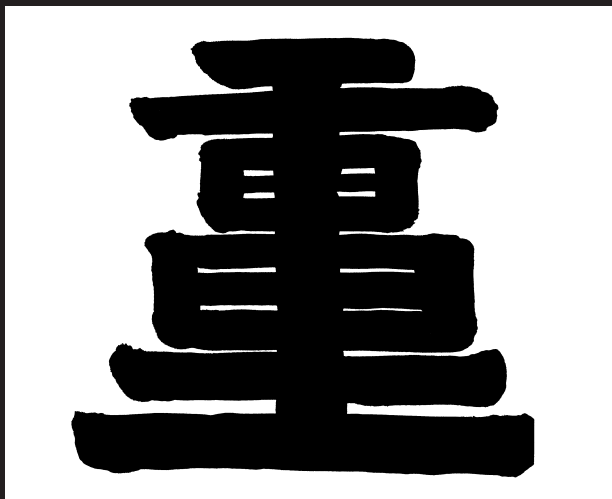
⑦



⑧



⑨

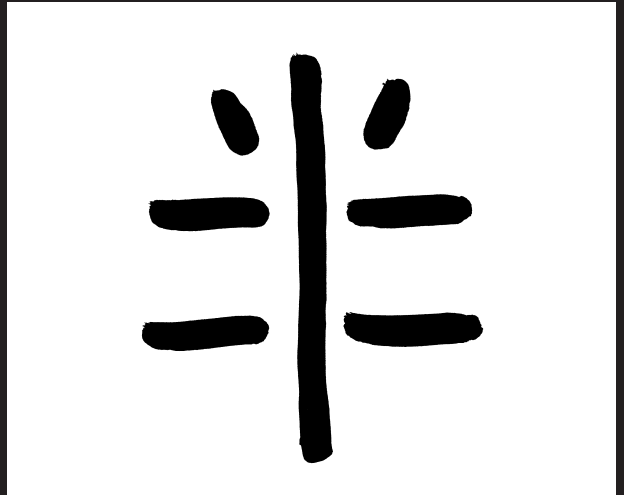


⑩

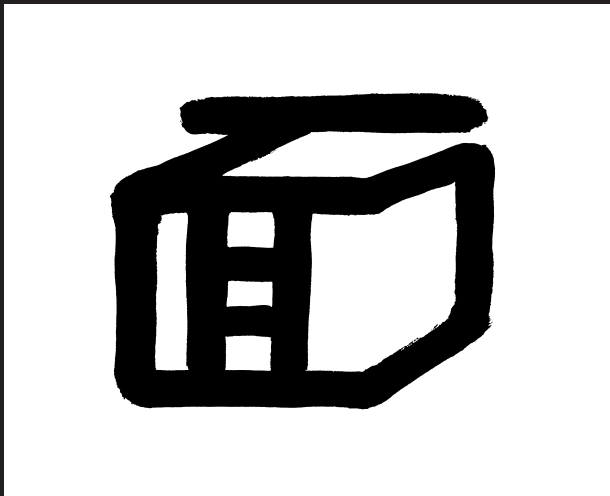
- ⑥「角」D02-082 高置有希
字のカドを強調して意味性を強めた
- ⑦「球」D04-126 松下剛士
求の右肩の点を移動させて玉とした
- ⑧「爺」D04-133 南出実紀
父の父は爺である
- ⑨「互」D03-244 本井美里
互いは2つあってこそ互いである
- ⑩「重」D01-086 高濱久代
ヘビ一級



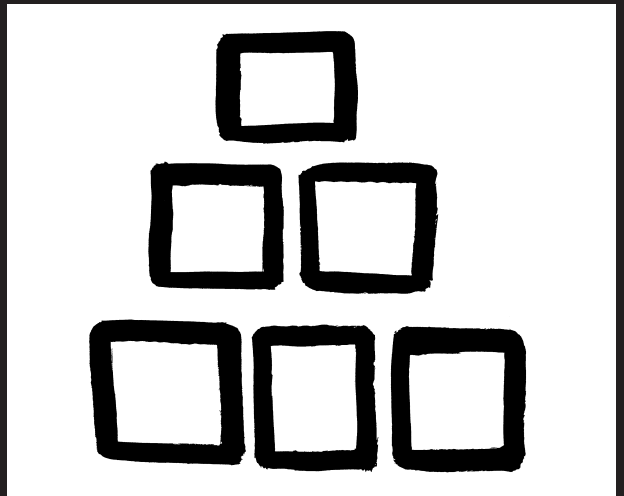
11



12



13

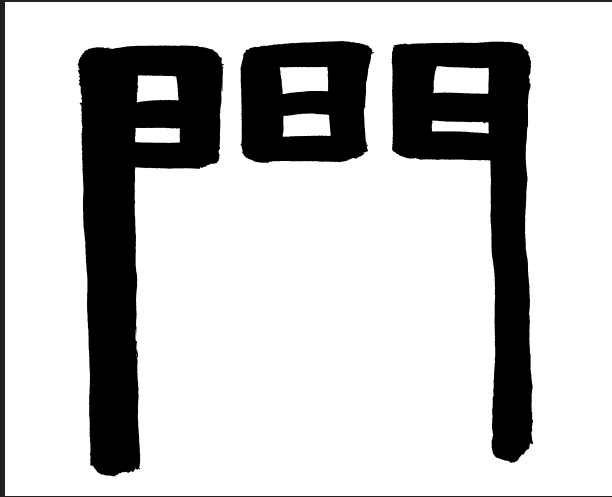


14

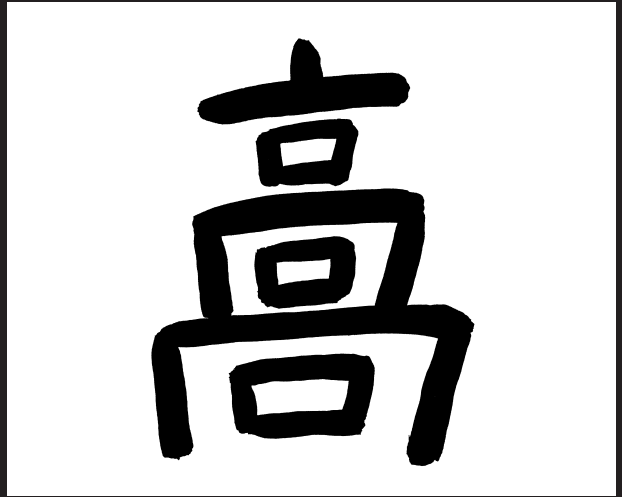


15

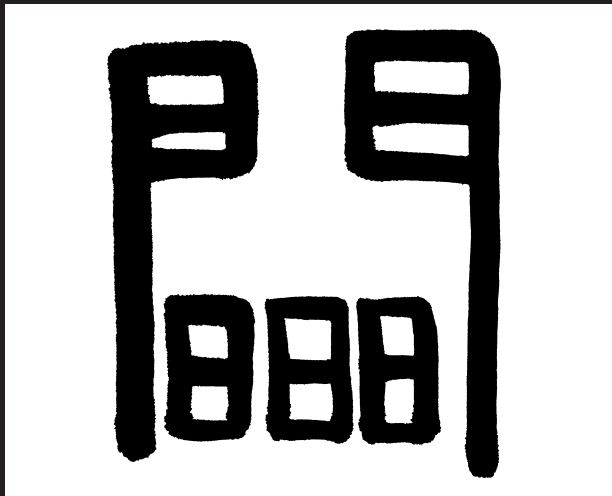
- ① 「偽」 D03-194 西 浩子
ホンモノとニセモノは紙一重ならぬ線一本
- ② 「半」 D03-240 藤永志乃
半分とは一つを二つに分けたものである
- ③ 「面」 D01-149 三好智子
立体にすると、想定外のサプライズ
- ④ 「品」 D01-209 宮原亜紀子
品数が豊富です
- ⑤ 「余」 D02-220 横山未代子
余りました



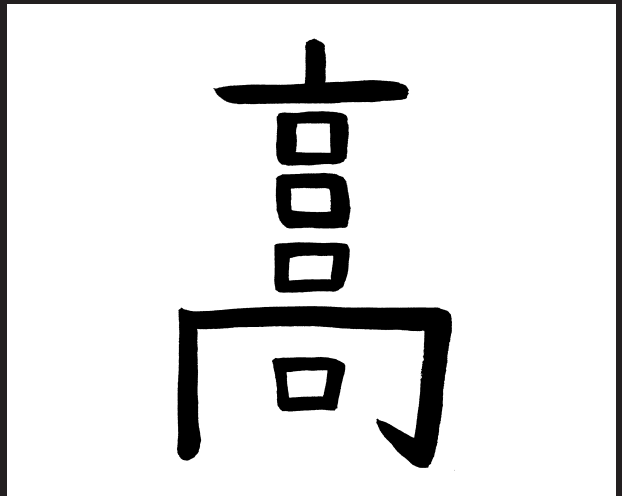
16



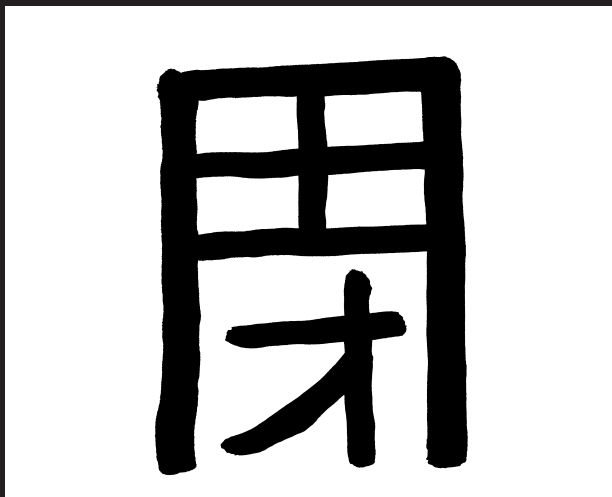
17



18



19



20

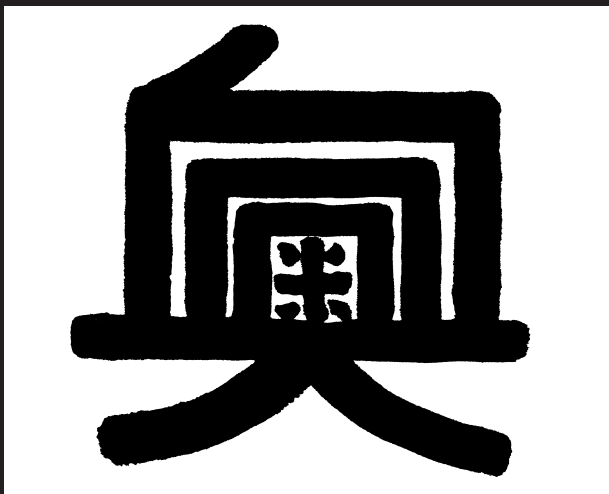
- ⑩「間」 D03-257 村田 啓
門のアイダから日が射します
- ⑪「高」 D03-011 井門俊之
本来「高」の字は敵を観察するヤグラから来ている
- ⑫「間」 D03-140 森 侑子
これ以上間は詰められません
- ⑬「高」 D01-139 増山沙苗
見はりのヤグラは高い方がよい
- ⑭「閉」 D01-069 櫻井彩美
門は閉じられました



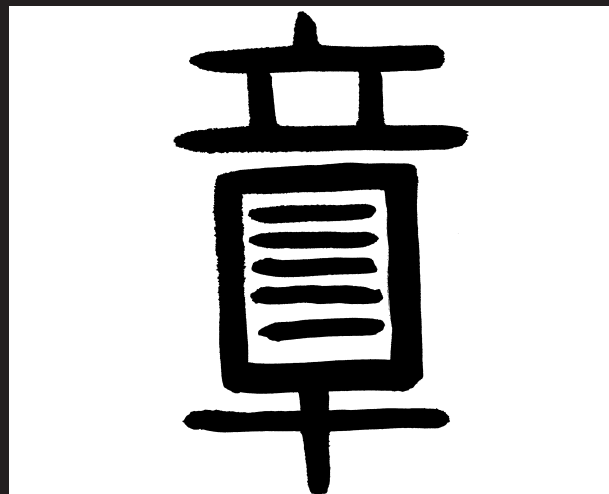
21



22



23



24



25

- ① 「鬼」 D03-132 松田 遥
人は仏にも鬼にもなるのだ
- ② 「群」 D03-036 川村健士
草食動物の羊は群れます
- ③ 「奥」 D03-130 松田真哉
奥をつくるーパッケージの原点
- ④ 「章」 D03-154 吉向優子
章のヨコ画を多くして行とした
便箋や手紙を連想させる
- ⑤ 「盛」 D02-136 藤井康雄
盛り沢山



26



27



28



29



30

この頁は数字か記号類をとり入れたものを集めた

- 26 「数」 D01-005 畔田千春
数字ばかりを集め〈数〉の字に
- 27 「郵」 D04-090 辻 和加子
郵政民営化による新しい会社のマークに提案しましょうか
- 28 「個」 D02-056 笠川雄一郎
「ニンベン」が数字の「1」にも見えるということに着目
- 29 「電」 D02-051 小嶋 亮
電の字は他におもしろいものがあったがこれがベスト
- 30 「順」 D03-019 大西美代子
1. 2. 3が順に並んでいます